

キャリア教育試論 —文科系学生のためのキャリア教育—

土方直子

1. はじめに

1990年代後半より「キャリア教育」という言葉が聞かれるようになった。経済状況の悪化、雇用の変化、進学率の上昇による高学歴化、核家族による家庭教育の変化、子供の気質の変化等の理由により、職業観を育成することが必要と考えられるようになったためである。

更に、2011年度より、キャリア教育を大学の設置基準の中に位置づけることが義務化され⁽¹⁾、今や、ほとんどの大学では「キャリアセンター」なる就職支援セクションを設置し、「キャリアデザイン」などの名称に代表されるようなキャリア科目を開講するようになった。

しかし、「キャリア教育」分野は歴史が浅く、かつ、「キャリア」という言葉は多様なとらえ方ができるため、様々な内容が存在している。一連の就職講座をもって「キャリア教育」としているところもあるれば、職業体験を「キャリア教育」と位置づけているところもある。そして、それぞれが確かに「キャリア教育」の一つといえるのである。キャリア教育には、いまだ確固たるスタンダードが確立されていないのが現状であり、効果的な内容の模索はまだ続くであろう。

本稿では、「キャリア教育」のあり方として1つのモデルを提唱したい。特徴となるのは、

- ①「キャリア」を「職業」という狭義の意味でとらえるのではなく「生き方」という視点からも考え、職業選択に関する知識だけでなく、「人生・社会・生活」に関する知識も組み込んでいること
- ②本学の学生の進路における特徴をとらえ、本学の学生にとって有益である内容を積極的に取り入れていること
- ③大学卒業時に目標とする社会人モデルをゴールとし、そこから逆

算して4年間に身につけることを系統的に学ぶことの3点である。

抽象的一般論にととまらず、具体的実践的な視点から「キャリア教育」を考えてみたい。

2. ライフキャリアという視点からのキャリア教育

2-1 「生きていくための知恵を授ける」というキャリア教育の側面

サニー・ハンセン⁽²⁾はその著書「統合的人生設計」⁽³⁾において、個人の人生において「仕事」「愛」「教育」「余暇」の4つの要素がうまくかみあわさってこそ、人生が「意味のある全体」になると述べている。それぞれにおける役割が別々に存在するのではなく、キルトのように織り交ぜられて充実した人生になるという「ライフキャリア」の視点を提唱した。

これまで、「キャリア」といえば、「仕事」あるいは「仕事に関すること」として捉えられることが多かった。しかし、21世紀を迎え新たな変化の波を実感している昨今、私たちはもう「仕事」のみを中心に据えた人生が幸福でないことを知っている。では、「幸せな人生」には何が必要なのか。幸せの考え方は人によって違うだろうが、ここではハンセンの定義が参考になってくるだろう。すなわち、「仕事」「愛」「教育」「余暇」を4つの柱とする考え方である。これらを視野に入れつつ、私が若い世代に伝えたい分野として「マネー分野」と「健康分野」が考えられる。幸せな人生には「仕事」「愛」「経済」「健康」のバランスが必要になってくるからだ。

ライフキャリアという視点に立って「キャリア教育」を考える時、「仕事」だけではなく、「マネー計画」「愛（パートナーシップ）」「健康管理」のそれぞれについて時間を設け、必要な知識や情報を伝える必要がでてくる。すなわち、「生きるための知恵」を授けるのである。

現在、大学で行われているキャリア教育の大部分は、上記の4つのうち「仕事」に主たる焦点をあてている。就職困難な時代であるがゆ

えに、「キャリア」を「仕事および仕事の経歴」という狭義の捉え方をし仕事の獲得に重点をおくのだろうが、この分野は比較的、伝える内容が明確で教えやすいこともあるのだろう。実務的な就職支援活動も含めて、「仕事」の分野へのキャリア教育は年々充実してきており、内容も確立されてきている印象を受ける。だが、仕事に関する知識があるだけではこの厳しい、変化の大きい、予測不可能な社会を「より良く」生きていくことは難しい。社会人になり、自立して全てを自己管理で生きていかなければならない卒業後の生活こそがまさに「本番」であり、幾多の困難に立ち向かわなければならないのである。社会の中でもまれながら、経験を通して様々な知恵を身につけてはいくのだろうが、社会人のスタート時点で最低限知っておくべきことがある。最近の学生は明らかに精神的に幼く世の中のことに無知で、「こんなことも知らないで社会に出て大丈夫なのか」と心配になる学生が結構な割合で存在しているというのが、日々、学生に接している私の印象である。

勿論、各専門分野の授業において必要な知識は伝授されているのだろうし、専門分野と社会生活を結びつける授業展開がまさに「キャリア教育」の一環といえるだろう。だが、例えば、「不当労働」に対しての対処の方法は、法学部で労働法を学んだ学生や、経済や経営学部で労働問題などを学んだ学生は知識があるのかもしれないが、外国語学部の学生にとっては全く未知の分野で方法を知るすべもない。しかし、「不当労働」は全ての学部の卒業生が経験する可能性がある。そうならば、生活上の主たる分野について必要最低限の知識・知恵を伝授する必要がある、それこそが「キャリア教育」の中で行われるべきだと考える。

2-2 各分野の具体的な内容

次に、各分野について何をどのように伝えるかについて考案したい。キーワードとなるのは、「広く浅く」「時流に沿って」おり、「具体的」であることだ。つまり、社会状況が変わればそれに伴う生活上

の問題も変化するので、そのつど、内容の見直しを図る必要があることとはいうまでもない。まさに、時代とともに変化する領域でもある。

また、伝えることはそれぞれの分野の必要なトピックの「現状」と、そこに問題がある場合には「問題解決方法の提案例」で良い。「こうしなさい」というアドバイスではなく、「こういうことが起きており、解決方法としてはこのようなものがある」という情報の提供であり、最終的に決めるのは学生自身である。

以下は、現時点で私が伝授すべき必要があると考えている項目である。

【マネー分野】

現代社会に生きる私たちは、日々、お金を使って生活し、お金との付き合いは生涯にわたるにもかかわらず、金銭に関する教育を受ける機会はほとんどない。そもそも日本では、お金はプライベートな問題であるため、その話を公ですることはばかのような精神風土があり、よほど金銭的に困窮した家庭で育たない限りお金を強く意識して育つことは少ない。大学生までは、自らの小遣いの管理が主であり難しくはない。

しかし、社会人として働き学生時代よりもまとまった金銭を得るようになれば、将来設計に基づくマネープランをたて、継続的に貯蓄をしていく必要性が生じてくる。そのためには、少なくとも基本的な金融商品の種類や貯蓄方法の知識が必要になるだろう。また、現代はカード社会であるため、クレジットカードをはじめとする各種カードの特徴やリスクに関しても知識はあった方がよい。

具体的には以下のような内容が考えられる。

- a. ライフサイクルにあわせたマネープラン（家計のしくみ）
- b. 具体的な貯蓄方法と基本的な金融商品
- c. カードとローンのしくみとリスク
- d. お金に関する諸問題（自己破産、債務超過など）

すなわちこの分野の目的は、地に足の着いた、生活者としての金銭感覚を養うことである。この場合、担当講師として、現役の銀行員やファイナンシャルプランナーなどの知見が有効となるだろう。

【愛（パートナーシップ）分野】

「愛」とは、目に見えず形のないものであるが、人が生きていく上で必要不可欠な「心の栄養」である。家族、友人、恋人等々、人は一生のうちにたくさんの、愛が存在する（と思われる）パートナーシップを必要とし経験しながら生きていく。中でも、大学生に関心が高いのは、次のライフイベントとして考えられる「結婚問題」である。近年は、ライフスタイルの変化に伴いパートナーシップの形態は多様化してきてはいるが、日本ではまだしばらくは「結婚」という形が主流であろう。実際にするかどうかは別として学生にヒアリングすると、9割方が「結婚する・あるいは結婚したい」と答える。そんなにも結婚への関心が高いにもかかわらず、お金の問題以上に公に伝えられることが少ないのが、「結婚」をはじめとする男女のパートナーシップである。

また、結婚後の夫婦のパートナーシップのあり方も重要な問題となるだろう。長引く不況や、雇用状況の変化から、結婚しても何らかの形で女性が働かなくてはならない社会になってきている。最初から共働きするケースもあれば、子育てで一旦、数年間家庭に入った後で社会復帰するケースも考えられる。

そうなれば、家事・育児・介護といった様々な家庭の諸問題も、夫婦2人で分け合って担当しなければならない。高度成長期に主流だった「性別役割分業」で、「男性は仕事」「女性は家事、育児、介護」という図式が崩れつつあるにもかかわらず、まだまだ家庭の問題は女性側が負わされることが多い。しかし、近年は、育児休暇などを取得し育児に積極的にかかわる「イクメン」⁽⁴⁾なるものも登場してきている。そうした側面も踏まえ、新しいパートナーシップの情報提供はあってよい。キャリア教育でそんなことまで取り上げるのかという声

が聞こえてきそうだが、ゼミナールで実際に結婚問題を取り上げたことのある私の予想では、学生の関心がとても高い分野であると考えている。

この分野の具体的な内容は以下の通りである。結婚以前の恋人関係における問題を取り入れてもよいかもしれない。また、多様なライフスタイルとして、シングルで生きることの諸問題や女性特有のライフスタイルについて考察するのもよい。

- e. デートDV、男女の対等な関係とは
- f. 結婚の現状と課題
- g. 家事、育児における男女の共同参画
- h. 現代の多様なライフスタイル

果たして、結婚の現状と問題点を学んだところでどのような効果があるのか。検証の方法としては、このような問題に取り組んだグループとそうでないグループの大学卒業後の人生を長期に渡り追跡するのが最も効果的だろうが、それには時間を要するだろう。

そこで、私のゼミナールの卒業生の事例を一つのサンプルとして紹介したい。

今年（2011）の11月、3年前に卒業したゼミ生が研究室に立ち寄った。その腕には、生後8ヶ月の愛娘を抱いている。突然の訪問に驚きながらも、彼女の卒業後の人生について話を聞いた。卒業後、内定していた会社に勤め電話営業の仕事をスタートさせる。朝から晩までひたすら電話をかけ続ける仕事に研修期間においてすでに大変さを痛感したが、家庭の事情もあり仕事を辞めるわけにもいかず、プレッシャーを感じながら頑張った。研修後は東京に転勤になり、初めて親元を離れての一人暮らしを経験する。しかし、厳しい仕事に耐え切れず、短大在学時から交際していた相手に「そろそろ結婚してくれませんか」と自らプロポーズをし、無事、結婚への運びとなる。地元に戻り、結婚によって経済的負担から開放された彼女は、ほどなくして図

書館の臨時職員の仕事をみつける。幼い頃から本が大好きで、司書の資格も取得し就職を希望したが、正社員の求人はほとんどないためあきらめざるを得なかった「憧れの図書館勤務」である。臨時職員で収入は少ないが、主たる家計を担う立場ではないため問題はない。再就職後に間もなく懐妊し、女兒を出産。図書館の仕事は産休がとれたのか辞めることなく、現在も続けている。子供は保育園に預けているが、祖母達がこぞって面倒をみってくれるので、彼女は悠々と仕事と家庭を両立させているという。今後の目標は、30歳までに3人産み終えて、図書館司書として経験を積み収入アップをはかりたいというものであった。あっぱれである。

学生時代は、どちらかというが目立たず、独自の世界観を持っていて個性的なところがあつたが、娘を抱く笑顔はどこまでも明るく屈託がなかった。あまりの順調な運びに思わず、「すごい！学生の時に希望していたライフプラン通りだね。23歳にして、夫、好きな仕事、かわいい子供を手に入れたじゃない」と感嘆したら、「ゼミで勉強したからですよ」と言う。「ゼミで結婚や女性のライフスタイルについて学んでいなかったら、こんな人生になっていなかったと思います」とも。

「女性のライフスタイルの考察」は、自らの関心も手伝って、私の長年の研究テーマの一つであり、本学ゼミナールでは女性の人生における諸問題を取り上げて考察してきた。偶然にも、彼女が在籍した年は「結婚問題」をメインテーマに取り上げた年だった。当時、「婚活」⁽⁵⁾という言葉がブームになり、マスコミにも取り上げられていて、山田昌弘氏の「婚活」の本⁽⁶⁾をテキストとしていたのである。

現代は結婚が難しくなっており、結婚を希望する場合は「必ず結婚するんだ」という強い意識をもたなければ、なんとなくシングルを続けてしまう可能性が高いこと。結婚を考えられるような出会いはそうそう多くはないので、20代でよい出会いがあつたら結婚を考えてみる。早めの年齢で結婚をしても、すぐに子供を産まなければ恋人気分を味わえること。近年の男性は、「草食男子」などと言われ、な

かなかプロポーズしてくれない人も多いため、自分からプロポーズするという選択もあること（若い世代では、女性からプロポーズして結婚したケースも実際多くなっている）。新卒で希望通りの就職ができなくても、結婚で経済が安定したら収入にこだわらず希望の仕事にチャレンジできるチャンスがあること。新聞、本、雑誌の関連記事を提供しながら、そのようなメッセージを伝えた。彼女は、毎回、熱心に話を聞いていた。食い入るような視線で、身を乗り出していたのを思い出す。

「それまでも、何となく結婚するのだろうなあと思っていましたが、ゼミで結婚の現実を知ってほんやりしていたらダメだと思ったんです。知るほどに、絶対に結婚しようという意識が強くなりました。男性からのプロポーズを待たずに女性からしている人も多いことを知り、プロポーズに対するこだわりも消えました。図書館の仕事は臨時職員でしたが、結婚によって、家計は夫が支えてくれることになったので迷わず挑戦できたのです」。

彼女の例は、たまたま自らの結婚への関心の高さが熱心に学ぶきっかけになり、卒業後のライフプランに生かされたといえるのかもしれない。現状を知ったことで危機意識を持ち、意識的に結婚にむけて歩き出したのだろう。誰しもが結婚問題に関心があるわけではないし、特に、男子学生ではそうした傾向が強いかもしれない。その場合は、多様なライフスタイルがあることや、シングルで生きることの特徴や課題を伝えることも効果的であろう。

【健康分野】

日本人の平均寿命がここまで長くなっている昨今（男性 79 歳、女性 86 歳）⁽⁷⁾、健全な身体作りに関する知識も「幸福な人生」にはかせない。従来、いわゆる「身体論」や「健康論」として教えられているものであるが、これを「キャリア教育」の中に組み込むことで、広く総合的に浸透させることを狙いとする。

私達は、普段、病気にならない限り健康を意識することは少ない。

しかし、良好なパートナーシップを築くためにも、仕事で成果を出すためにも、心身共に健康でなければならない。ポイントは「心身共に」というところである。ここで考えられる内容としては、以下のようなものが挙げられるだろう。

- i. 健康な身体とは。健全な食生活とは
- j. 健康を促進する運動方法とダイエットの考え方
- k. 中高年期の代表的な病気の現状とその予防方法
- l. 「こころ」の健康を保つためのポイント

いずれも、誰しものが生活の中で向き合う可能性のある内容である。これらについて、基本的な知識を持ち、きちんと自己管理できるようになることを目標とする。

以上が、私が考える「ライフキャリアという視点を取り入れたキャリア教育」のコンセプトである。a～lの12項目について、最新の知見を持った学内外の専門家にサポートを要請することも必要だろう。

また、担当者をすぐに学外に求めるのではなく、学内の優れた資源を有効活用する必要がある。学生に触れる機会が最も多く、自学の学生の気質やレベルを熟知しており、学生の卒業後の人生に思いを馳せる教職員が、教育の成果として目指すゴールのために力を結集して作り上げるキャリア教育こそ、生きた教育なのではないだろうか。

3. 文科系学生に特化したキャリア教育

大学における「キャリア教育への取り組み」は、出口対策への大学側の配慮として父母からの関心も高く、今や大学案内でも前面に掲載されるほど重要課題になっている。過去に長く続いた新卒学生の大量採用の時代は終りを告げ、大学卒の就職難民は増えるばかりである。特に、理系学生のように何らかの明確な専門技術を持たない文科系学

生にとっては、その年の経済状況に大きく左右され苦戦を強いられている。

現在、キャリア教育として様々な取り組みが行われているが、就職対策を柱として自己分析や職業理解などを中心に展開され、就職内定をゴールとして終了するケースが多い。私は、以前からこの「内定をゴールとして終了」という考え方に疑問をもっている。内定を得た後、卒業までの半年以上の期間を有効に使えないかと考えている。この期間を、最後の学生生活としての自由時間を残しつつ「社会人への橋渡し期間」として機能させるのである。

学生時代に社会人への準備は必要なのか。日々、実際に昨今の学生と接している身として、私は必要であると考えている。特に、偏差値の低い、特殊な技術をもたない文科系の学生ほどその必要性は高い。就職後の早期離職を防止するためにも、大学生活の最後の期間に社会人への地ならしをしておくことは効果がある。

では、具体的に何をどの程度行うのか。ビジネス実務教育の中から、「職場常識」「ビジネスコミュニケーション（書く・話す）」という広く社会人に必要とされる内容を中心に行い、更に、文科系学生に特化した内容として「サービス接遇実務」に関する知識の基本の習得を提案したい。これは、例えば本学の例をみても、彼らの就職先がサービス業に多く、何らかの形で接客要素を含むという特徴を考慮しての内容である（98 ページ資料参照）。

3-1 職場常識

知っておくべきであるのに、現代ではなかなかきちんと教えられることが少ない常識的な行動の指針。様々な年齢層が共同、協調して働かなくてはならない職場における適切な気配り。個人差、地域差は多少あれども、大多数が「よし」とする考え方。ここ 10 年の IT 技術の躍進によってコミュニケーション方法が大きく変わり、かつてのいわゆる「常識」が通用しない可能性のある世代にとって、この「職場常識」を学ぶことは重要な意味を持つ。

私は、もう一つの専門分野としてビジネス実務教育の授業を行っているが、職場常識に対する学生のニーズはとて高い。自らの考えや振る舞いに自信が持てない学生も多く、一応の基本的考え方や行動の指針を学ぶことは精神的安心感につながり、職場での振舞いが確かなものとなる。卒業生をみても、上司や先輩からの受けもよくスムーズに職場に溶け込むことができている。

職場常識は、それぞれの会社や業種・職種によって差があるものなので、スタンダードを教える際には、ビジネス実務技能検定協会が主催する「ビジネス実務マナー検定」⁽⁸⁾を参考にするとよい。なかでも「3級」は新入社員向けとなっており、学生にも理解しやすい内容である。アルバイトをしている学生にとっては、実際に経験していることも多く実践的である。

また、職場常識をある程度理解している学生は企業にとっても有益である。企業独自のルールや考え方を教える必要はあるが、基本的な考え方がわかっていれば理解が早い。また、基本習得にかける時間を短縮して、本来の業務を教える段階に入りやすい。学生時代に職場常識のイロハを身につけていれば、「シュガー社員」⁽⁹⁾と呼ばれることはないだろう。

3-2 ビジネスコミュニケーション（書く・話す）

本学の卒業生の例を見ても、文科系の大学生の就く職業は、「営業」「販売」「事務」「サービススタッフ」が代表的である。これらの仕事に共通しているのは、「人を相手としてコミュニケーションをとり、パソコンなどの簡単な操作があり、文書を通して確認する」という要素である。だとすれば、この3点を中心としたビジネスコミュニケーションについて学んでおくことは、学生の助けとなるだろう。

パソコン操作に関しては、現代に必須のツールとしてその技術習得にはどの大学も力を入れており、情報リテラシー等の科目として必修化しているところが多く問題はない。

「書く」コミュニケーションについては、通常の講義における様々

なレポート作成で力をつけていることを基本とし、仕上げとしてビジネス文書の基本形式を学び、案内状、礼状、各種報告書等の基本的なものを作成できるようになっていることが望ましい。例えば、社交文書⁽¹⁰⁾といわれるビジネス文書は特有の言い回しが用いられる場合が多く、読書量が著しく減少している昨今の学生では、正確に読むことすらできないのが現状である。これらの言葉に関して知識をもっていることは、社会人のスタート時点で他の新入社員との差別化に繋がる可能性は高い。

「話す」コミュニケーションについては、敬語の使い方を基本とし、ビジネス電話のコミュニケーションスキルの習得が必要だろう。また、職場でのコミュニケーションの基本が「報告・連絡・相談」といわれることから、「報告」の手順や方法について、また、ビジネスは様々な交渉の連続であるため「交渉術」なども学べると大変有益である。

3-3 サービス接遇実務

キャリア教育の最終段階で、「サービス接遇実務」として、サービススタッフに求められる心構えや気配り、接客の基本動作やクレーム対応の考え方を学ぶ。これが、私が提案する「文科系学生に特化したキャリア教育」の特徴である。キャリア教育の一つの領域として「職業教育」という側面があるが、その要素を取り入れるのである。前述した通り、北海道においては文科系学生の大部分がサービス業の中から仕事を選んでいく。職種は様々であるが、人と接し、何らかの商品やサービスを提供するという点で共通している。これらの職種においては、接客のイロハはOJTを通して上司や先輩の振る舞いを手本としながら、その職場特有のコミュニケーション方法を身につけていく。しかし、企業によっては「見よう見まね」で体得させて現場に出すやや乱暴なケースも実際にあり、送り出す側としては心配も残る。現場に出てしまえば仕事に追われ、体系的に何かを学ぶ機会はまずない。

接客に関する知識として学ぶには、例えば、ある程度時間がとれるようであれば「販売士」⁽¹¹⁾の資格を取得させる方法がある。販売士は範囲が広く、学習時間が長いということであれば、ビジネス実務技能検定協会の主催する「サービス接客実務検定」⁽¹²⁾を取得させるのもよいだろう。こちらは、販売士よりは範囲が狭く、週1回の講義15回で2級を取得することが可能であり、2級の知識があれば接客の基本はマスターできる。

現在、キャリア教育については模索の時期で、各大学においても試行錯誤を繰り返しながらベストな道を探している。スタンダードな内容は取り入れるとして、より柔軟に考え、各大学の特色や理系・文科系の専攻にあわせて、特化した内容を盛り込んでもよいのではないだろうか。それぞれの大学が、自学の教育の集大成としていかなる「職業人候補」を育成したいのかを明確にし、それに対して必要な内容を盛り込んでいく。大学生活の最終段階に、各学部で学び身につけたことを職業人として生かせるように仕上げる味付けをする。学びの集大成としてのキャリア教育があってもよいのではないだろうか。

4. 大学4年間のスパンで考えたキャリア教育モデル

ここでは、これまでに論じてきた内容を基に、具体的なキャリア教育モデルを提案する。

そのコンセプトは、

1. ライフキャリアという視点から、仕事に関する内容・就職活動に終始せず幅広い内容を盛り込むこと
2. 文科系学生に特化した内容として、ビジネス実務教育を取り入れること

の2点である。ビジネス実務教育は社会人への連結の一環として4年次に行い、ライフキャリアについては具体的な就職活動に入る前の、まだ、就職が遠くに感じられる1年次に取り入れる。

キャリア教育は必修科目として設置し、1年次から4年次まで4年間かけて段階的に行う。

現行の履修方法では、文科系学部の場合は3年次でほとんどの単位をとり終えることが可能で、4年次はゼミナール以外は大学に来ないという学生も多い。勿論、学生時代の最後の時期であるから自由な時間を謳歌することの重要さも理解できる。しかし、実際にヒアリングしてみるとさしたる活動をするとなしに漫然と過ごしているケースも多く、緊張感を保つためにも、週に2～3度の講義は必要であると考ええる。

全体的な流れとしては、全体論から各論へ、抽象論から具体論へと進める。スムーズな流れで、それぞれがバラバラではなくきちんと連結されるようなコーディネートとフォローが必要であろう。大まかな流れは、以下の通りである。

（キャリア教育の流れ）

- ①大学1年次→ライフキャリア教育（人生全般に関する必要知識を学ぶ）
- ②大学2年次→ワークキャリア教育（自分を知る、職業を知る）
- ③大学3年次→就職活動支援（就職活動全体を学ぶ）
- ④大学4年次→社会人教育（ビジネス実務教育を通して、社会人教育の先取り）

①大学1年次「ライフキャリア教育」

大学生活をスタートさせたばかりのこの時期は、就職はまだまだ先の出来事である。従って、ここでは有意義な大学生活の過ごし方を含め、人生や生活に関する「知恵」を身につけるのが最適であろう。成人を迎えるにあたって、ふさわしい大人としての基本的な考え方や振る舞いも含め、広くライフキャリア教育を展開させる。詳細な内容については、第2章で論じているので割愛し、項目だけを挙げることにする。

(主な内容)

- ・マネープラン
- ・パートナーシップ
- ・健康管理

②大学2年次「ワークキャリア教育」

大学生活にも慣れ、勉学、部活・サークル、アルバイトに忙しいこの時期は、まだ就職に対する意識は明確ではないだろう。だが、3年次には具体的な活動に入らなければならないことを踏まえ、徐々に自分と仕事を繋げる作業が必要となる。「自分の特徴」を知り、「仕事の特徴」を学び、点と点を線で結びつけるのである。柱となるのは、まず「自分を知ること」、そして「仕事を知ること」である。

「自分を知る」、これは大変難しいテーマである。所謂、「自己分析」と呼ばれる作業がそれに当たり、どの大学においても就職活動支援に必ずといっていいほど組み込んでいる内容である。同時に、その範囲の広さと導き出す答えの曖昧さに学生が頭をかかえる分野でもある。

自分へのアプローチの仕方は様々であるが、主に、以下のような方法がある。

・自分史からのアプローチ

(誕生してから現在までの自分を時系列に追いかけて、それぞれの時代の体験やその頃の嗜好、性格の傾向などを分析し、主観的に自己像を明確にする)

・アセスメントからのアプローチ

(各種性格検査等を利用し、タイプ別に導き出される性格や嗜好の特徴、能力から客観的に自分を知る)

・性格(長所、短所)分析からのアプローチ

(性格の主だった特徴を分析し、それらを柱として自分の特徴を

知る)

- ・自分以外の視点からのアプローチ
(グループワークでの話し合いや、他からのアドバイス等を通し、他との比較によって自分の姿を明らかにする)

これらはどれも、単独か、あるいは組み合わせで、既に行われている方法である。「自分を知る」という抽象的なテーマを探る中では、学生が取り組みやすく分かりやすい方法だろう。

だがしかし、自己分析はいくら行ってもきりがないものでもある。そもそも、「自分が何者であるか」という疑問は生涯かけて答えを探していくような大テーマであり、簡単に答えが出せる問題ではない。自身の成長と共に変化していくものだろうし、また、自分が何者かがわかったとしても、自分を生かす仕事に就けるとも限らない。

私は、仕事に結びつける参考にするための自己分析は、最低限、消極的アプローチができていれば良いと考えている。「自分は何が好きか、得意か」を探る自己分析を「積極的アプローチ」とするなら、「自分は何が嫌いか、苦手か」を探る自己分析を「消極的アプローチ」とし、少なくとも「苦手、嫌いなこと」だけでも明確にしようという考え方である。「食わず嫌い」であれもこれも嫌で苦手というのでは話にならないが、かれこれ15年、勉強や学生生活を過ごしている中で自分なりに把握している「この作業を行うのは苦痛を伴う」あるいは「うまく出来ない」という分野を明確にし、その能力を多く発揮しなければならない仕事を避ける。いわゆる仕事の「ミスマッチ」を回避するのである。

そもそも、文科系の大学を選択している時点で、その先にある職業の選択肢は限られている。数百ある種類の中から自由に選べるわけではなく、ごく限られた職種の中から、優先順位をつけて挑戦していくしかない。職業選択は現実的なものである。学生時代に仕事に対して「夢」や「やりがい」を過剰にふくらませすぎると、現実との落差

に肩を落とすことになるであろう。大学を卒業したら「働く」ことを当然の前提とし、自分の興味や能力を照らし合わせて、淡々と仕事を選ぶ。しかし、それは決して「夢のない」ことではない。仕事をしていく中で様々な目標は出てくるものであるし、それに挑戦することによりやりがいを見出すこともあるだろう。「現実的」に夢をみるのである。小学生の頃のように「何者にでも」はなれないかもしれないが、確実に「何者か」にはなることはできるのである。

具体的には、2年次の春学期を「自分を知る」時期とし、秋学期を「仕事を知る」時期とする。内容は以下の通りである。

【自分を知る】

・アセスメントからのアプローチ

アセスメントは、①能力検査と②性格検査の2つの分野から、それぞれ2種類程度実施する。実施する検査があまり多すぎると、混乱の元になるからである。こうしたツールは、結果が客観的でわかりやすい利点を持つと同時に、「こうなんだ」と決め付け、その結果にとらわれすぎるという危険性がある。しかし、統計データから客観的に導き出される結果は、自分の知りえなかった側面をみせてくれることがあり興味深い。男女を問わず若い世代には人気が高いアプローチであろう。

各種検査は多数販売されているので、信憑性が高く、実施が比較的簡単で、結果のわかりやすいものを吟味する。実施する人数によっては、一人あたりの単価も考慮にいれなければならない。どんなに精巧なデータがでるものであっても、価格の高いものを導入する必要はない。自己分析は、アセスメントだけに頼るものではないので、参考程度で十分である。

・自分以外の視点からのアプローチ。

これは、グループワーク等を通して自分の意見や特徴を他人に話し、他からのフィードバックによって、他からみた自分の特徴を明ら

かにする方法である。価値観や興味を問うような質問の答えをグループで発表しあい、コメントをもらうというスタイルが一般的である。多人数の場合、実施には工夫が必要になるだろうが、知らない人とコミュニケーションを取れるため、楽しみながら取り組めるという利点がある。ただ、最近、問題になっているケースに、知らない人と即興的なコミュニケーションをとるのが苦手という学生が増加していることがある。その場で作られた初対面どうしのグループで他人に気後れしてしまい、自分の意見を発表することに苦痛を生じ参加できなくなるのである。

キャリア教育を必修として位置づける場合、このような学生へのフォローが必要になってくる。グループワークを実施する際には、人数に応じてアシスタントを複数名つけて、話し合いがうまく進まないグループのサポートをする必要があるだろう。

【仕事を知る】

「仕事を知る」とは具体的には、その仕事の内容や必要とされる能力、キャリア・パス⁽¹³⁾、雇用状況などを理解することである。まずは、それぞれの仕事、あるいは職種における上記のような特徴を学ぶ。この場合に大切なことは、すでに大学生になっており就職が近づいていることから、抽象的ではなく具体的に仕事を知っていくことである。

すなわち、文科系大学生が実際に就いている仕事に的を絞り、実際に働いている人から話を聞き、質疑応答を行うスタイルである。その際の人選を、大学のOG・OBに絞ると更に効果的である。学生は、自分達の延長線上のモデルとして現実的な目標を立てやすい。

自学の卒業生の活躍をみれば、自分の将来を重ねやすくなるだろう。

本学の例を挙げるとすれば、文系の中堅校であり、接客・販売・サービス分野へ就職している学生が大半で、教職課程もあることから教育関係を目指す学生もいる。出来るだけ多くの職業人の話を聞けれ

ばよいが、時間の制約があるので、各分野 2～3 名程度が限度であろう。「営業」「販売」「サービス」「教育関係」「その他（公務員等）」という 5 分野にわけ、トータルで 10 名程度の職業人の話を聞き、仕事をリアルにイメージしていく。

また、組織に属する以外の働き方、つまり、サラリーマンではなくフリーランスという形態についても紹介する必要があるだろう。実際に活躍している OB・OG がいれば話をしてもらうのも良い。新卒からいきなりフリーランスという形態は少数派であろうが、一度、サラリーマンを経験した後にフリーランスで働く可能性はあり得る。生涯に 1～2 度の転職を経験する人が増えている昨今の状況をみれば、フリーランスで働くことのメリット・デメリットを知っておくことも必要だろう。

③大学 3 年次「就職活動支援」

1 年次に、「人生・生活」という広い分野から社会を知り、2 年次に「自分」と「職業」について分析を終えると、いよいよ 3 年次に具体的な就職活動に突入する。3 年次は 1 年間かけて就職活動支援を行う。現状では、15 回～20 回程度の就職活動講座の中で各項目 2～3 回ずつで行われているものを、授業にして 30 回で行うのである。春学期は「書く」ワークを、秋学期は「話す」ワークを中心にし、実技を通して実践する。やる気のあるなしにかかわらず、最低限一度は必要な書類を作成し、必要なトークを経験してもらう。

盛り込む内容は以下の通りである。

【書く】

- ・文書作成の基本マナー
- ・自己分析をもとに、自分史を作成し、プロフィールを作成
- ・履歴書作成
- ・作文、論文の作成

*特に重要と思われる履歴書については、複数回時間を設け、基本

的に完成させることを目標とする。

【話す】

- 話し方の基本マナー
- グループディスカッション
- 集団面接
- 個人面接

＊ディスカッション、面接練習は1度経験しただけでは成果はでない。最低でも3回程度実践できることが望ましい。その場合、履修人数が多ければ実施方法に工夫がいるだろう。履修者が300名以上になった場合には、個人面接練習の実施は難しくなる可能性がある。そうしたケースでは、集団面接練習において、一人ひとりの発言回数を増やすなどの工夫でとりあえず対応する。その上で、希望者に対して個人面接を行うという方法で対処する。

④大学4年次「社会人教育」

現在行われている「キャリア教育」や「就職支援」の多くは、就職内定が出た時点で終了である。就職内定を得ることが、キャリア教育の現実的なゴールであり、就職支援活動の成果であるからだ。学生もまた、内定が出た時点で全ての活動を終了させる。内定が出る時期は個人差があるので一概にはいえないが、夏前に内定を得た学生であれば、秋学期にあたる半年以上が自由時間となる。こうした4年次に必修科目として「キャリア教育」を設置することは賛否両論あろうが、私は、社会人への連結作業の一環として、ビジネス実務教育をキャリア教育の最終仕上げにもってこることを提案したい。この連結作業を強化することにより、学生から社会人への移行をスムーズなものとし、早期の離職を防ぎ初期キャリア形成の円滑化を図る。具体的な内容については第3節で論じているので、ここでは割愛する。

卒業生の声を聞くと、ビジネス実務がいかに現場で役立っているかを実感することができる。例えば、ある学生はコールセンターに就職

したが、入社してすぐに敬語に関する言葉遣いのテストがあったという。その結果によってレベル毎にグループ分けされたが、授業で習得していたため、一番上のクラスに入ることができたようだ。また、ある学生は家電量販店に勤めたが、数日間の研修をうけてだけで電話応対を任されることになった。練習を積んだ社員でも、初期の電話はなかなか緊張するものであるが、電話応対を実技で学んでいたため落ち着いて出ることができたという。

ビジネスの現場では、「書く力」（各種文書作成等）、「話す力」（敬語を使ったコミュニケーション、プレゼンテーション、交渉、提案、報告等）が必要である。それらの一部を大学4年次に強化することにより、常識をわきまえ、職業人として適切な所作を身につけた社会人の育成をすることが出来ると考える。

5. まとめとして～今後の課題～

キャリアカウンセラーとして、また、ビジネス実務教育に携わる教員の立場から、キャリア教育の1つのモデルを紹介した。しかし、私自身、このスタイルが完成型だとは思っていない。「キャリア教育」は新しい学問分野で歴史も浅く、その範囲の広さ、定義の曖昧さを考えると、体系的に確立することの難しさを痛感する。また、今回の私の試みのように、「キャリア」を「仕事」中心の意味から「ライフ＝人生」という領域にまで広げると、講義として成立させることの難しさも感じる。もともと日本人は自らの内面を人前であらわにしない国民性が根底にある上、「いかに生きるか」というテーマは自らが静かに考察する哲学上の個の問題として見做されてきた故に、実務教育として教授されることにある種の違和感を覚えるのかもしれない。また、18歳時点では目先の現実が重要で、このようなテーマに関心を持ってない学生もいる。このテーマを授業として行う際には、いかに抽象論にとどまらず、具体的な身近な問題として意義付けできるかが重要な課題となってくるだろう。

キャリア科目の必修化にも課題はある。科目の性質上、評価方法として試験形式にすることは難しく、単元毎のレポートであったり、毎回の授業のリアクションペーパーであったり、キャリアプランニングや自己分析の課題などを元にして評価するのが一般的だが、内容の差別化をはかるのが難しい。他に比べて「楽勝」な科目として真面目に取り組まず、キャリア科目の時間は寝るか、しゃべるかという学生が多数いるという現状も耳にする。講義として関心を持たせ、集中させるには様々な工夫が必要である。

また、就職支援の段階になるとどうしても個別対応の必要が生じてくる。授業として意識付けを行いながら、キャリアセンターで個別対応を行うなど、密接な連携が欠かせない。

例えば、授業で多人数に履歴書やエントリーシートの作成ポイントを講義してあるはずなのに全く頭に入っておらず、結局、キャリアセンターのスタッフやカウンセラーが一から説明しなければならないことも頻発している。授業としてあまりに効果が上がらないのであれば、別の方法も考えなければならないだろう。

以上のように様々な課題が山積しているキャリア教育であるが、私はその必要性については確信をもっている。もはや、これまでの生き方が通用しなくなっている21世紀を生きていく一つの指針として「ライフキャリア」の視点は必要かつ有効である。

アメリカで発祥した「キャリアカウンセリング」もここ10年の間に、日本文化に定着してきた感がある。キャリア教育に関しても、例えばサニー・ハンセンの「統合的人生設計」の様々な試みが、日本人気質や日本文化に適合するような工夫を持って取り入れられる時、21世紀を生きる若者に新しい発想と大いなる覚醒を与えてくれるに違いない。その橋渡し役として、更に考察を続け、新しいキャリア教育への試みにチャレンジしたいと思う。

註

- (1) 文部科学省は、近年の若者の雇用情勢の厳しさを考慮し、大学の設置基準を改正した。
平成 23 年 4 月 1 日より試行された新設置基準では、大学教育において、キャリア教育の実施を義務付けている。
- (2) ミネソタ大学教育・人間発達系教育心理学部名誉教授。専門はカウンセリング心理学。
キャリア概念の中に、家庭における役割から社会における役割までを含め、人生における概念「ライフキャリア」を提唱した。
- (3) サニー・ハンセンによって提唱された「統合的人生設計」とは、21 世紀に人生を有意義に過ごすための指針として、4 つの要素（「仕事」「愛」「余暇」「教育」）のバランスを大切に、それぞれを統合させてバランスをとり人生におりまぜてこそ、人生が「意味のある全体」になるという考え方。
- (4) 「イケメン」が変化した言葉で、育児を積極的に率先して行う男性、育児を楽しんで行う男性を意味する。ユーキャン新語・流行語大賞で、2010 年のトップ 10 となった。
- (5) 「結婚活動」の略称で、就職活動（就活）に見立てて、社会学者 山田昌弘が考案し提唱した造語。
- (6) 山田昌弘、白川桃子共著『「婚活」時代』（ディスカヴァー・トゥエンティワン 2008）
- (7) 日本人平均寿命 厚生労働省 2010 年資料より
- (8) 財団法人実務技能検定協会が主催するビジネス系検定の一つ。
ビジネス実務マナー検定は「職場常識の育成」を目標としており、ビジネスマンとしての判断・行動が適切であるかどうか、人間関係・マナー・話し方などが適切であるかどうか問われる。
3 級は新入社員、2 級は中堅社員、1 級は管理職向けの内容となっている。
- (9) 社会保険労務士の田北百樹子が提唱する、主に若者を中心とした、日本的な労働価値観に反感を覚える、社会人としての自覚やモラルに欠ける者を指す言葉。
そのように甘やかされて育った若手社員を、砂糖（シュガー）の甘さと虫歯のイメージに喩え、会社を「溶かしてしまう」要因になると指摘している。
- (10) ビジネス文書の中で、特に、交際業務におけるやりとりに使われる文書のこと。

礼状、案内状、見舞い状、お悔やみ状などがある。特有の言い回しが多く、丁寧な表現が必要とされる。

- (11) 日本商工会議所、及び、各地商工会議所が実施する、販売に関する検定試験。

3級レベルで「小売店舗運営の基本的なしくみを理解し、販売員としての基礎的な知識と技術を身につけ、販売業を行うことができること」とされている。

- (12) 財団法人実務技能検定協会が主催するビジネス系検定の一つ。

サービス接客実務検定は、販売やサービススタッフとして必要とされる来客対応の基本的考え方、行動の仕方、話し方などを学ぶ。

洋服店、病院の窓口、レストラン、ホテルなどを舞台として来客とのやりとりの具体的事例が多く、学生にとっても理解しやすい内容になっている。

- (13) 仕事の経験を積みながら、次第に能力や地位を高くする順序や、そのための一連の職場や職種。あるいは、その目的のための職場を異動する経歴のこと。

参考文献

L.SUNNY HANSEN 『Integrative Life Planning』1997 Jossey-Bass Inc., Publishers

ノーマン C. ガイスバース、メアリー J. ヘブナー、ジョセフ A. ジョンストン 『ライフキャリアカウンセリング～カウンセラーのための理論と技術～』生産性出版、2002 年

エドガー H. シャイン 『キャリア・アンカー』白桃書房、2003 年

渡辺三枝子、五十嵐浩也、田中勝男、高野澤勝美著 『大学生のためのデザイン・キャリア』ナカニシヤ出版、2011 年

渡辺三枝子編著 『キャリアの心理学』ナカニシヤ出版、2007 年

宮城まり子 『キャリアカウンセリング』駿河台出版社、2002 年

岡本祐子 『女性の生涯発達とアイデンティティ』北大路書房、1999 年

大久保幸夫 『キャリアデザイン入門Ⅰ・Ⅱ』日本経済新聞社、2006 年

小杉礼子編著 『若者の働きかた』ミネルヴァ書房、2009 年

高橋俊介 『自分らしいキャリアのつくり方』PHP 新書、2009 年

八幡成美 『職業とキャリア』法政大学出版局、2009 年

同志社大学社会学部産業関係学科編 『“働く”を学ぼう』人文書院、2011

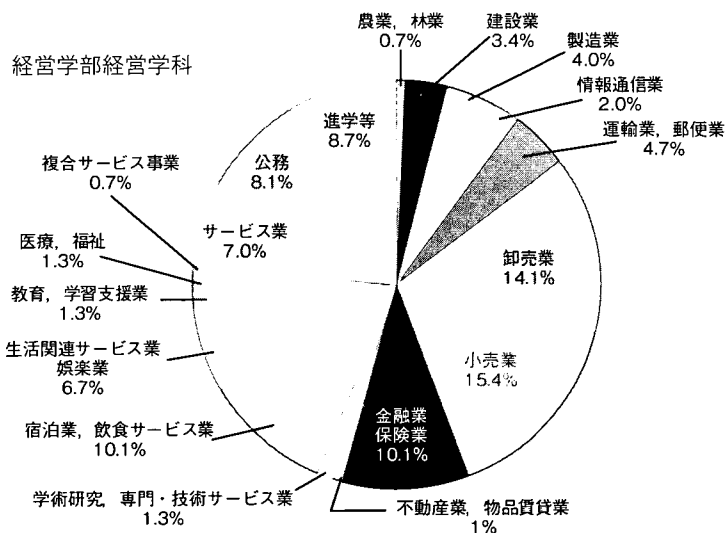
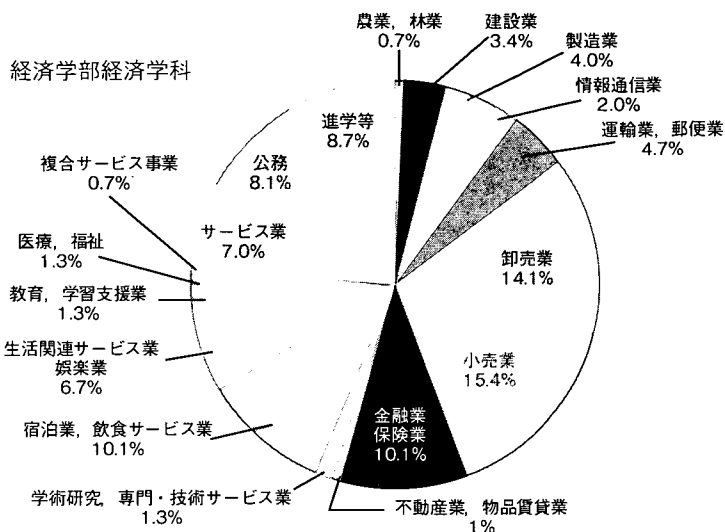
年

児美川孝一郎『若者はなぜ「就職」できなくなったのか?』日本図書センター、2011 年

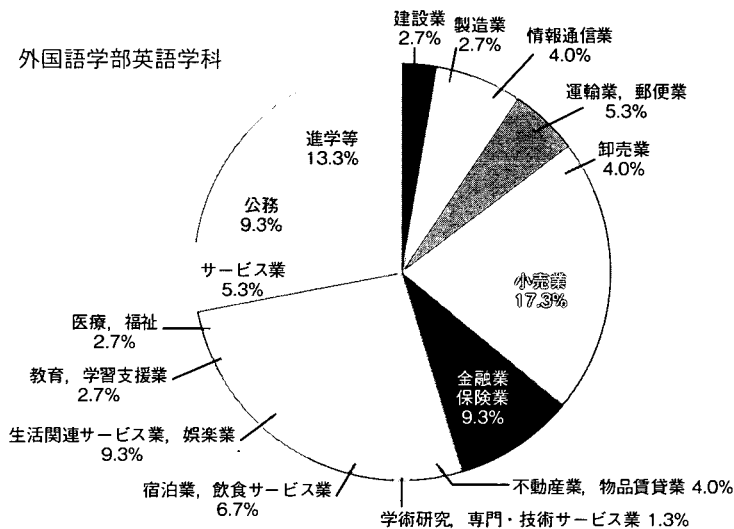
財団法人実務技能検定協会編『ビジネス実マナー検定受験ガイド3級(改訂新版)』早稲田教育出版、2010 年

財団法人実務技能検定協会編『サービス接客検定受験ガイド2級』早稲田教育出版、2007 年

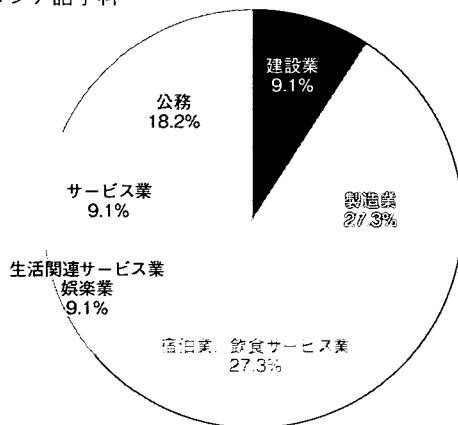
2009年度 札幌大学学生就職先業種別割合（札幌大学入試センター作成資料より）



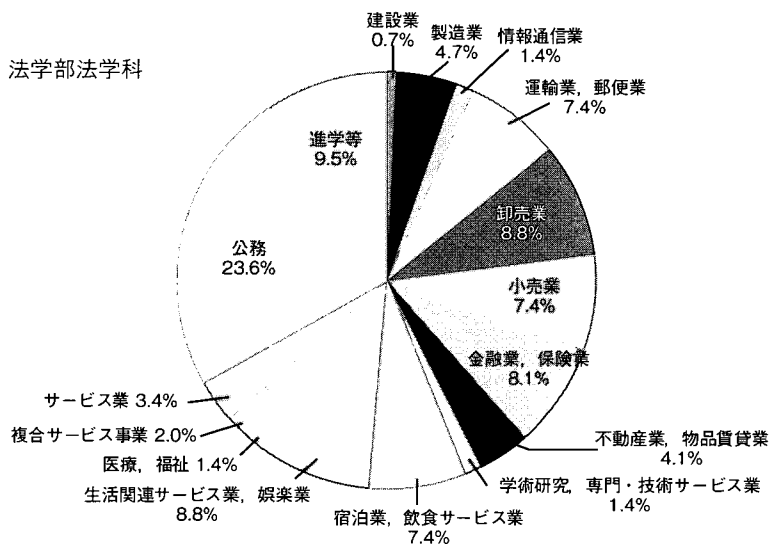
外国語学部英語学科



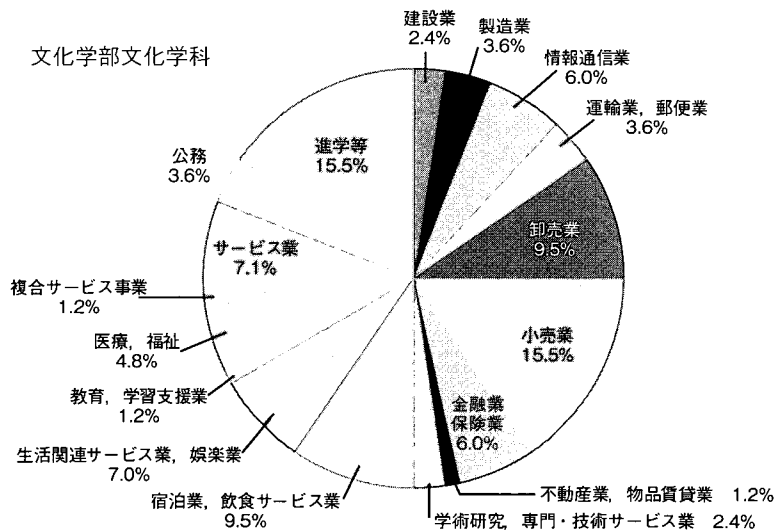
外国語学部ロシア語学科



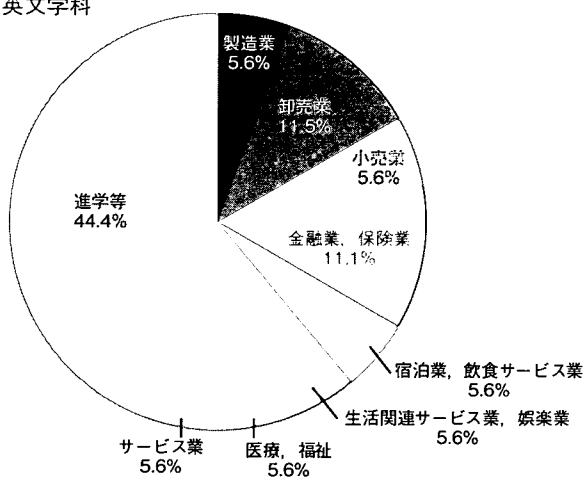
法学部法学科



文化学部文化学科



女子短期大学部英文学科



女子短期大学部経営学科

